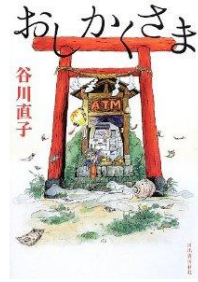


谷川直子
第49回文藝賞受賞作「おしかくさま」



「このまま売れないエッセイストで終わりたいくない」と新人賞に応募し続けたという。1960年生まれでも、新人賞をもらえるのが作家の世界。サラリーマンなら肩たたきの世代に入ってしまうのだが、筆力次第ということなのだろう。

*記事引用；日本経済新聞より

23 読書 【第三種郵便物認可】 2012.12.2

読書

あつがきの

お金の神さま、「おしかくさま」をめぐる小説で今年の文芸賞を受賞した。「例えお祝いを包む時、お札に思いを乗せているようにどこか神がかっている。そんなお金が持ついろんな力を書いてみたかった」主人公のミナミは49歳のライター。離婚後に鬱病を患い、定収はない。母から父の浮気調査を頼まれたことをきっかけに、お金が増える御利益があるというあやしげな「おしかくさま」を信じる4人の女たちと出会う。主人公とその家族らの姿を通して金銭や信仰の意味を問う物語だ。

素地になっっているのは自身の体験だ。競馬にまつわるエッセーを書いてきたが、40歳の時、最初の夫で作家の高橋源一郎氏と離婚。鬱病になり、人間不信

「おしかくさま」 谷川 直子氏

に陥った。「仕事で人と会わなければいけないのがつらくて。どうやって生きていくか、お金はどうするかずっと不安だった」。求人誌をめくっても40代で応募できる仕事はほとんどなく、お金の重みを実感した。昨年、東日本大震災も執筆を後押ししたという。苦労してためたお金で建てた家が津波で流される一方で、有名人が億単位で義援金を送っていた。モノを買うのとは違う働きを見た。「おしかくさま」は本物か、インチキかは明かされない。「人は信じるものがないと踏み出せない。たとえ

金銭や信仰の意味問う

それがお金の神さまでも、信仰にはピュアなものがあると書きたかった」

7年前に再婚し、長崎県の五島列島に移住。「このまま売れないエッセイストで終わりたいくない」と小説を書いては新人賞に応募し続けた。今作は「背水の陣」の覚悟だったという。

幼少時代から愛読しているフランツ・カフカと、SFの大家フィリップ・K・ディックに影響を受けた。「ストーリーが面白くて飽きさせない。自分も読者に次のページをめくらせるような小説を書きたい」（河出書房新社・1200円）



(たにがわ・なおこ) 1960年生まれ。編集者を経て文筆業に。競馬・ファッションのエッセーなどを手がける。著書に『競馬の国のアリス』『洋服はうれしい』など。

文藝賞

- ・河出書房新社は、新人の登竜門として、小説のジャンルに「文藝賞」を設定している。
- ・枚数は400字詰原稿用紙100枚以上400枚以内